

七、災 害

御荘地区に関係のある天災地変については、まとまった記録はないが、藩政時代の災害についての研究記録や、南宇和郡史・内海村史・御荘警察署沿革誌などの文献により調査したり、部落の古老や直接関係のあった人々に当たってたずねたりして、おもなものについて概要を知ることができた。これを年代順にならべると次の通りである。まず時代別の特徴を見ると、大体において藩政時代には洪水・干害のあとの飢饉きまひが多く、明治大正時代には暴風雨や大洪水による被

害が目立ち、昭和時代になっては土木技術が次第に進歩したにもかかわらず、相変わらず集中豪雨による被害が多いことは、天災というよりもむしろ人災というべきではないかと思われる。その上たびたびの台風や地震津波による被害のあったことも、この時代の特徴といえよう。

昭和二〇年の終戦後からは、この地方に毎年のように台風が来襲し、豊後水道を北上するかまたは斜めに進行するものが多く、宇和海沿岸や南宇和郡一帯を台風銀座と呼ばれたりしたが、ここ数年間は中心が通過したり接近することが少なくなり、被害はほとんど見られなくなった。最近はときどき集中豪雨に見舞われることはあっても、小さいがけ崩れがある程度で、僧都川をはじめ河川については、堤防工事が次第に整備されてきたので、前のような洪水による被害がなくなったことは、よろこばしいことである。

寛文一〇年（一六七〇）六月、御荘に大洪水があつて田畑の被害が大きかった。

延宝七年（一六七九）七月、御荘一帯に大暴風雨があり、洪水によって井手が残らず被害をうけた。

享保六〇九年（一七二一〜一七二四）四ヶ年にわたり、暴風雨と大干ばつが続ぎ、さらに一三〜一六年の間にも年々

風雨が荒れた上に、虫害が重なつたため大飢饉となり、山陽・西海・四国一帯にわたつて餓死した者、約一六万九

九〇〇人を数えたという。宇和島藩でも連年の凶作のため、各地に救済物資をおくつたり対策を立てたりした。

宝曆 四年（一七五四）九月、御荘に洪水があつて被害が大きかった。

安永 五年（一七七六）七月、御荘に洪水があつて被害が大きかった。

天明 七年（一七八七）六月、御荘に水害があつて死人が出た。七月にも洪水があつた。

安政 三年（一八五六）この地方一帯に大地震と津波があつた。古老の話によると、何日も続いて大地がゆれ、人

々は山や竹やぶへ避難したが、ゆれのひどいときは足をすくわれて歩けなかつたという。地震のあとの津波がまた大へんなもので、中浦湾では海の底が干し上るくらいに潮が引いたかと思つたと、見るまにふくれ上り、平地の人家

はほとんど浸水して畳や座板まで流された。山に避難した部落民は、潮が引いたわずかな時間に急いでわが家に帰り、食糧や着物など残つた物資を持って山へのがれた。こんな生活を数日間もすごした人々は、生きた気持ちもななく恐れおののくばかりで、地震と津波のおさまるのを待つた。何戸かの家が流されたというが人には被害がなかつたことが何よりであつた。

明治一七年（一八八四）秋、暴風雨があつて開花期の稲作が全滅に近い被害をうけた。

同 一八年（一八八五）豪雨のため僧都川がはらんし、城辺村中組から西の一帯が浸水した。

同 一九年（一八八六）秋、暴風雨のため人家が破かいされ、農作物に被害があつた。

同 二七年（一八九四）八月、大干ばつがあつて御荘内海連合で雨乞千人踊りが行なわれた。

同 四二年（一九〇九）八月、高知県南西部沿海にサンゴ漁に出ている漁船が、突然の暴風雨のため遭難漂流し、郡内漁民で死者一七、行方不明五三というこの地方では最大の人的被害を見た。この時猿鳴の人が一人死に、中浦の人が三人漂流中救助されたという。

明治 四四年（一九一一）八月、暴風雨で僧都川がはらんし、かけかえたばかりの観栄橋は流され、田畑の浸水農作物の被害も甚大であつた。その復旧には機械力も皆無の時代で、くわ・じょうれん・もっこなどを使つての労働で、人々の苦勞は並大ではないであつたという。

大正 二年（一九一三）七月、集中豪雨のため僧都川の堤防がけっかいし、平城でも家屋の浸水があつた。

同 三年（一九一四）九月、これまでにない大暴風雨があつて、御荘町その他各地で家屋の倒れがあり、圧死者

も出た。町内では中浦一人、菊川で一人の死者があつた。

同 九年（一九二〇）八月、豪雨による大洪水で僧都川がはらんし、ほとんどの橋が流された。（観栄橋も流失）城辺でぎおん祭りの斗牛がひらかれていたが、集まっていた人たちが帰るのに、橋という橋が流されていてこ

まったというから、いかに急な洪水であったかがわかる。郡内各地で大きい被害があったが、御莊でも家屋流失六戸、浸入一七三戸、田畑の流失およそ九ヘクタール、道路堤防の破かい一二ヶ所におよび、復旧に数年もかかる大被害をうけた。

昭和二年（一九二七）九月、暴風雨のため中浦に死者一人あった。

同 九年（一九三四）この年は大干ばつのあった年で、六月二四日から九月八日まで七〇日間も日照りが続いた。

水田一一四ヘクタール、畑一〇一ヘクタールに大被害をうけ、農山漁村の疲へい窮乏は深刻であった。

同 一八年（一九四三）七月、大雨が数日も降り続き、僧都川の堤防が城辺地区で二ヶ所大きく決壊し、城辺町の町すじから西側一帯にかけて浸水した。御莊町でも観栄橋付近の土手が崩れ、和口橋や観栄橋も流失し、田地が浸水したり土砂に埋まるなど被害は甚大であった。

菊川部落では、軍用資材の切り出しで、ほとんどの山ははげ山になっていたため、山地の各所で土砂崩れが起こったが、特に現在の砂防ダム設置個所では山津波となって谷川をうずめ、水位を高めて一度にどつどつ下流に流れ出した。

その上、当時軍用建築の松材を伐採して山地に積まれていたのが、大量に流れ出して堤防に激突したため、「一のせき」から下流の堤防は川口までずたずたに崩れてしまった。このため、この流域にあった民家四戸流失し、（ほかに一戸山崩れで倒かい）小学校から下流の田はほとんど河原になるくらいの大被害をうけた。さらに痛々しいのは、宇和島和霊様の大祭にいくため、菊川を立った夫婦が途中で土砂崩れにあい、雨も次第に強くなるので引き返し、菊川橋をやっと渡り切ったとたん、土砂混りの激流におし流され、自宅を目の前にしながら二人とも濁流に吞まれてしまった。夫は幸い流れの途中で立木にかかって九死に一生をえたが、妻は遂に行方不明になり、町内消防団や地元住民の捜査も空しく、やっと一週間後になって、河原となった田の中で死体が見つかった。まことに悲惨

な災害であった。

猿鳴でも石垣がくずれ、その下じきになって死者一人を出している。

同 二〇年（一九四五）九月、終戦を迎えて窮乏生活から何とか立ち上ろうとした矢先、九州枕崎に上陸した大型台風（風速四二メートル）は、豊後水道を斜めに進行して、一七日夜半近くから中心が郡内をかすめて通過した。その風力の強いことは近年に例がないくらいで、雨戸を吹き飛ばされて夜半に避難したり、海岸では高潮のために山ぎわにのがれたりしたところもあった。恐々として一夜を明かした人々は、その被害のあまりにも痛ましい状態に、一朝にして生きる力を失うくらいの打撃をうけたのである。家々の瓦やトタン屋根が無残に吹き飛ばされて、見かけもないあわれな家が多かったが、それにもまして、食糧事情のどん底にあって、せめてものこの秋の稲作といもの収穫に、生きる望みをかけていた農作物がほとんど全滅に近い大被害をうけ、風当たりの強いところの水稲は、穂先がまっ白になって収穫が皆無の状態になり、海岸部のいも畑は、葉もつるも刈り取られたようにはぎ取られ、段畑ははだか同様の悲惨な姿になっていた。この台風は全国各地に大きな被害をもたらし、わが国の食糧事情はますます苦しくなったが、このため、当時の統制経済ではとても生きていけないという不安も大きくなり、食糧のやみ取り引きが次第にはびこるようになった。

同 二十一年（一九四六）一二月、潮の岬南西の海底を震源地とした南海地震は、この地方でも震度五という強いもので、まもなく津波がおしよせ、御莊湾の真珠いかに被害があった。また、御莊湾の海岸一帯に護岸のきれつや海



昭和18年7月、平城観栄橋付近の水害復旧作業

岸線の沈下が起こった。

同 三五年（一九六〇）五月、南米のチリに起こった地震津波がわが国の太平洋岸までおしよせ、御莊湾でも、わずかな時間に上下四メートルをこす潮位差で潮の出入りがくり返され、平山・成川・赤水・高畑・中浦・菊川など湾内一ぱいの真珠いかだが流されたり沈んだりして、養殖施設や真珠貝・手術貝など一億四千万円もの大被害をうけた。長崎港では潮の引いたときは岡と小島や大島の間が陸続きになり、干せ上った海底にビチビチはねている魚を、潮がおしよせてくるまで、かごを持って採りにいったという珍しい状況が見られた。

同 四三年（一九六八）四月、日向灘地震によりこの地方でも震度四の強い地震におそわれた。また八月には震度五の宇和島湾地震が起こった。どちらも数分間の強い振動があり、その後にもたびたび余震があつて、気持ちの上での不安は続いたが、小さいがけ崩れがあつた程度で、津波もなく、この地方では格別の被害がなかつたことは何よりであつた。